

〔コメント〕

岩崎公弥報告「メソスケール地域の地誌的資料としての近世村絵図の利用」によせて

五十嵐 勉

I. はじめに

岩崎報告は、尾張藩の近世村絵図を地誌的資料として用い、一定地域（メソスケール地域）での景観や環境の復原を目指したものである。従来の個別的な村絵図資料から、1村ないし数ヵ村単位での景観や環境を復原する伝統的手法を越えたものとして注目に値する報告であった。

以下、近世村絵図を地誌的資料として用いるという方法論上の問題と、結果として得られた景観や環境の地誌的復原の問題に分けてコメントしたい。

II. 地誌的資料としての村絵図

まず第一に、全体討論の場でも会場から指摘されたことでもあるが、岩崎氏の言うメソスケール地域の広がりについての検討であろう。この点に関してのコメントを、会場では述べられなかったが、かなり大きな問題があると思われるので、あらためて指摘しておきたい。

それは、個別的な村絵図そのものは、ミクロスケールの資料であり、多数残存する同時代の村絵図資料を空間的に「連続」させて、ある一定の広がりをもつ地域をメソスケール地域として地誌的に再構成することは、得られた結果が定性的なこともあってマクロスケールとの区別が明瞭ではない。本報告はほぼ2郡程度の広がりを対象としたものであるが、地域の相対的な広狭のみでメソスケールとするには、多少の無理が感じられた。

第二に、そのような「メソスケール」地域の地誌的資料として村絵図を利用する場合には、多くの制

限を伴うが、その意味でも報告者が示した四つの条件、すなわち、「①村絵図の空間的連続性、②作成年代の近似性、③作成目的の同質性、および④絵図書式上の統一性」の問題は、首肯できるものであるし重要な指摘であろう。

それゆえに、本報告で用いられた尾張藩の村絵図、特に最も残存数の多い天保期の村絵図については、その作成目的や作成過程、および精度や記載内容(様式)などについての基本的性格に関する側面を詳しく検討すべきであろう。特に、景観や環境の復原には、描かれたものと描かれなかったものの分類や、絵図の精度についての吟味が、より重要であろう。

尾張藩の村絵図は、川村博忠氏が体系的に指摘したように、寛政期の『張州府志』補訂、天保から弘化期の『尾張志』編纂など、藩撰地誌の編纂には、数度の作成時期がみられた(川村博忠『近世絵図と測量術』古今書院、1992)。岩崎氏も指摘したように、天保期の村絵図の作成と『尾張志』編纂との関連は、十分に吟味されるべきであろう。

これら寛政～天保期の村絵図と、そしてその前後の『張州府志』・『尾張徇行記』・『尾張志』などの地誌書との関係、特に『尾張志』と村絵図の記載内容の比較は重要である。それは、メソスケールないしマクロスケールでの地誌的資料としての藩撰ないしそれに準ずる地誌書が、村絵図の資料的限界を補正し、また村絵図の資料批判にも通ずるものとして位置づけられるからである。

これは、岩崎氏が個別的な景観や復原に際して、主に『徇行記』を参照していることにも関連するが、天保期の村絵図を用いる限りにおいては、より直接

的に関連する『尾張志』の記載内容との比較が不可欠であろう。

III. 景観・環境の地誌的復原

まず第一に、村絵図を中心とした名古屋城下周辺地域の地誌的描写として、①東部丘陵地域における山林荒廃と砂入地の発生状況、②西部低地地域における島畑の卓越状況、③城下町隣接地域における都市化の状況の三つが指摘された。いずれも、前述の方法が生かされた結果として注目される。

この中では、特に、①の山林荒廃や砂入地、砂留林などについて、絵図表現上どのように描かれているのか、山地植生の描き分け、および藩側の視点で描かれているのか村人のそれかなど、情報の客観性について、もう少し吟味して欲しかったし、願わくば復原された定性的分布を補強する定量的データの提示なども必要ではなからうか。

第二に、シンポジウムの共通課題でもある環境にかかわる問題として、自然環境と土地利用の側面から視た地域的特色があげられる。本報告では、①砂

入地発生にかかわる尾張東部丘陵地帯の山林植生と山林利用、および②低湿地地域における土地利用形態の二つの問題が提示された。発表時間の制約で十分に論じられなかったが、新田開発や薪炭材の採取による土壌流出、山林保護のための施策、低湿地の土地利用としての島畑と商品農業の関係など、今後さらに分析が加えられれば、村絵図の地誌的利用の有効性がより高められるものと期待したい。

IV. おわりに

本報告は、尾張に関する報告者の多くの研究業績をもとに、さらに近世村絵図利用のあらたな可能性を示したものとして注目されるものであった。特に、報告者の提示した四つの条件をある程度満たす他藩（萩藩・佐賀藩・鳥取藩など）においても同様な検討が可能であるし、明治初期の地籍図を利用した分析にまで応用可能な方法論の提示であったといえよう。

(佐賀大学教養部)